## 家庭科教育部会

### 1.はじめに

本支部では、昨年度より「衣生活に関する指導」の研究を行っている。昨年度は、市内小学校からアンケートに協力していただき、そこから小学校家庭科の授業が抱える課題、また、中学校が重点的に指導していかなければならない項目、補充する項目が次のように明らかになった。

**アンケートより、小学校家庭科で被服教材を指導する上で困っていること**
・一人で能率よく指導していく工夫がないかと悩んでいる。（１クラス３０～３６名）
・ミシンの扱い・玉留め・玉結びなどの定着に時間がかかる。
・経験も少なく、手先が器用でない子も多いので、指導が難しい。

以上を踏まえて、今年度は、中学校で押さえる「まつり縫い」「スナップ付け」の２つに重点を置き、研究を進めてきた。アンケートや生徒の声から、授業で扱えるように、２つの手縫いの視覚教材の作成を行った。また、その中で「まつり縫い」の授業実践を行った。

### 2.研究経過

４月　研究組織づくり、研究テーマの確認
５月　研究内容の検討、アンケートの作成・実施
６月　アンケートの集計・考察
　　教材研究①（ＤＶＤ視聴、師範見本づくり）
８月　教材研究②（視覚教材づくり）、授業案検討
　　授業実践（勝沼中学校　鈴木美奈子教諭　「まつり縫いをしよう」）
９月　レポートの検討

### 3.研究推進員

永田恵子（牧三小）
鈴木美奈子（勝沼中）　古屋奈穂子（山梨南中）　村田有紀子（塩山中）　深澤麻美（山梨北中）

### 4.研究テーマ

進んで生活を工夫し、創造する能力を育てる授業のあり方

### 5.研究内容

(1)教材をつくるにあたって本年度実施した生徒のアンケートから（対象　基礎縫いを学習した中学生約350人）

まつり縫いは、３分の２の生徒が難しいと感じており、その理由として「針を刺す位置がよく分からない」、「布をすくう加減が難しい」、「手順が分からない」、「最後の玉留めが難しかった」などの理由が挙げられた。また、スナップ付けも同様の傾向があり、「狙い通りに針が通らなかった」、「手順が分からない」、「糸を針に巻くところが難しかった」などの理由が挙げられた。

しかし、難しいと感じた生徒が多いにもかかわらず、授業後「まつり縫い」、「スナップ付け」に関して、予想以上に実践している生徒もいた。（各クラス３割程度）また、実践していない生徒も過半

数が家庭生活で「自分でやってみたい」という意欲的な意見を持っていた。こういった前向きな生徒の姿勢を大事にしながら、生徒の不安解消や苦手克服のために、手順を明らかにした手縫いに対する視覚教材や師範見本を使った授業実践の必要性を改めて感じた。

(2)授業実践

本研究の授業実践として「まつり縫い」の授業を行った。ここでのポイントは次の３つである。

①導入部分での工夫

すぐに実践に入るのではなく、なぜ「まつり縫い」という縫い方があるのか、小学校で学習した「かがり縫い」との違いは何かに触れながら授業を始めた。

②視覚教材の工夫

作成した「まつり縫いの手順カードを各班に配布し、そして、拡大投影機を使用し、まつり縫いの技術指導を行った。

③ワークシートの工夫

学習後に授業の流れを振り返ることができるように、ポイントを整理し、縫い方の写真や図を入れるなど、ワークシートの構成を工夫した。

また、言語活動の充実を意識して、実践の中で学習したことや感じ取ったことを言葉で表現させるため、ワークシートにまつり縫いの特徴を自分の言葉で説明する欄を設けた。

(3)授業後の感想

今回の授業では、作業に入る前に「どんなところに、どうしてまつり縫いをするのか。」という事を生徒に考えさせ、「どうしたらきれいにまつり縫いができるのか。」を確認してから作業に取り組ませた。このため、生徒達はポイントを意識して作業に取り組んだので、ほぼ全員が時間内に作業を終わることができた。授業後の自己評価では、「まつり縫いの方法がわかった。」と答えた生徒がほとんどであった。しかし、「適切な縫い目の大きさ・布をすくう分量」では、まあまあできたと答えている生徒が多く、もっときれいに仕上げられるようになりたいと反省に記入していた。

また、家庭科部会で協力して製作した師範見本や手順カードは、生徒が考える手助けとなったり、作業を開始してからの手順の確認に役立った。しかし、実物投影機を使っての提示の仕方には、さらなる工夫が必要であると感じた。改善策として、ビデオやパソコンの活用を提案していただいたので、これらの機器を使用しての授業を実践したいと考える。

今回の授業を通して改めて、細かな教材の準備と「どうして、この縫い方や手順で作業するのか。」ということを考えさせることの大切さと必要性を実感した。今後も、教材の提示方法を工夫する中で、基礎基本の定着を図れる授業の実践をしていきたいと考える。

**6.成果**

○教える側として、事後アンケートを参考にし、生徒の立場になって「まつり縫い」や「スナップ付け」の技術を分解して丁寧に考えて教材を製作することができた。

○拡大投影機やビデオを活用することで、生徒たちの興味関心を高め、効果的に説明することができた。

○研究が効率よく進められたので、授業に生かし、生徒たちに還元できた。

（部長　深澤麻美）